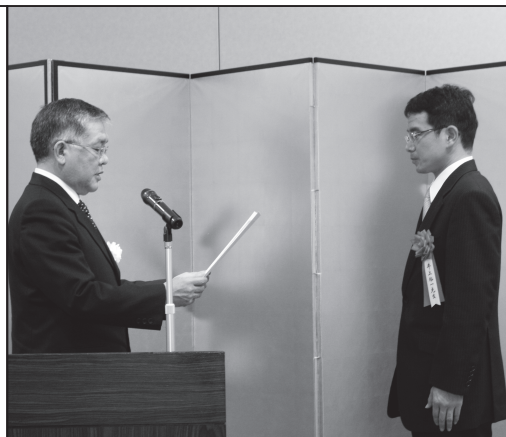


●優秀賞

地域の特色に対する見方や考え方を高める社会科学習の工夫

熊本大学教育学部附属小学校 いのうえゆう いち 井上裕一



I はじめに

県の特徴を考える学習は、地域学習のまとめを意図した位置づけとして取り扱われることが多い。そこでは、「〇〇地域の特産物について調べよう」「〇〇地域の人々のくらしについてまとめよう」「自分が調べた地域について発表しよう」といったように、テーマについて調べてまとめる学習が中心となってくる。

このように自ら資料を活用して調べ、わかったことをまとめる学習は、学習意欲や資料活用能力を育てることとして大切であると考えられる。しかし、こうした学習は、県全体の地形的な特色、産業的な特色といった視点で、様々な特色ある地域の事例を網羅的に取り上げ、調べる活動を通し、県全体の様子や特色をつかませようという指導者側のねらいが先行しがちである。そこで、このような学習に対して、子どもたち自らが必要感や切実感を高めて追究していくような社会科学習を工夫していく必要がある。

そこで、今回の実践では、一つの農作物を切り口に、地域の特色（地形や気候、人々のくらし）についての見方や考え方を高めていくことができるような学習を工夫する。

II 見方や考え方を高める社会科学習

社会に対する見方や考え方は、社会的事象を見る目と社会的事象のとらえ方のことである。子

どもたちは、ある事象に関して、それぞれ自分なりの見方や考え方でとらえている。他者とかかわり合う中で、自分の見方や考え方や友達のそれとを比べたり関連づけたりして、社会的事象の意味や働きをより多面的、総合的に見たり考えたりすることができるようになる。

そこで、そのような社会的事象に対する見方や考え方が多面的に高まっていく社会科学習を次の2つの視点から工夫する。

1 切実感をもって追究できる教材

子どもたちの追究意欲が高まり、かつ、自分なりの見方や考え方を十分に発揮しながら追究するためには、子どもたちが切実感をもつような教材を工夫することが大切である。ここでいう切実感とは、自分にとって身近な問題や差し迫った問題というのではない。「どうしてそうなるのか納得できない」「自分は～と考えるのに、なぜ～のようなことが起きるのだろう」といったような自分の考えと社会的事象のずれ、及び、自分と他者の考えの違いもその子にとって解決すべき切実感のある問題としてとらえる。

2 多様な視点からかかわり合うことのできる場の設定

(1) 自分の考えをまとめたシートの活用

互いが主体的に話し合いに参加できるようにするためには、自分なりの見方や考え方をもちえておく必要がある。そこで、自分の考えとその根拠を明確にしたシートを用意し、意見を交流する

中で友達との共通点や相違点を明らかにすることができるようになる。そして、子どもたちが、調べたことを持ち寄ってかかわり合えるように、グループや全体で話し合う場を設定する。

こうしたシートは、事前に教師が子どもたちの追究の視点やこだわりを把握する上でも有効である。事前に話し合いをする際にかかわらせたい考えを教師が見取り、グループや全体で取り上げることができる。

(2) 調べ活動における体験や資料提示の工夫

子どもたちのこだわりのある考えを引き出すためには、それぞれの関心や目的に応じた調査活動ができるような環境づくりを工夫する必要がある。

見学を単元の中で効果的に位置づけ体験的な活動を充実させる。また、子どもたち自身が、複数の資料を読む中で自ら必要な物を探したり、自分の言葉に直したりすることができるよう、資料提示の仕方を工夫する。

そして、それぞれが見たことや読み取った事実を自分の考えのよりどころとしてシートにまとめさせる。そうすることで、話し合いが空想のものとしてではなく、具体的な根拠をもとにしたものになり、事象を多面的にとらえていく契機になっていくと考える。

(3) 子どもの問いやこだわりのある考えをつなぐ

子どもたちそれぞれが出した考えは、自分なりの見方や考え方であり、他者の思いがけない考えに出会ったとき、新たな疑問が生じてくる場合がある。そのため、課題解決に向けた話し合いにおいて、「なぜそんなことが言えるのか」といった問いや「～のはずだ」といったこだわりのある考えが出される。こうした子どもたちの問いやこだわりのある考えを教師が積極的に取り上げる。さらに、そのような子どもたちの発言を教師がつなぎ、整理していく中で、話し合いが焦点化され、社会的事象に対する見方や考え方が多面的に高まっていくと考える。

Ⅲ 学習の指導計画

1 単元名

第4学年 熊本の「人吉緑茶」茶筒ラベルを作ろう

2 単元について

～お茶作りから見える人吉盆地～

本実践では、地形条件から特色のある地域として熊本県南東部に位置する人吉盆地を取り上げる。盆地は、地形の構造上、中心部に広がる平坦地とその周辺を取り巻く斜面に大別される。人吉盆地では、両地域とも盆地特有の霧と昼夜の寒暖差を生かした農作物が生産されている。

このような人吉盆地の特色を考えさせる媒介として、お茶を取り上げる。お茶は、自然への依存度が極めて高い作物である。特に寒暖差が大きく、霧の深い地域が、おいしいお茶のできる環境条件といわれている。人吉の特産物でもあるお茶を扱うことで、郷土への関心を高めながら、昼夜の寒暖差が激しい人吉盆地の気候や地形をとらえていくことができる。一方で、そうした一日の寒暖差の激しい谷間やくぼ地で発生しやすい霜には十分な対策が必要であり、お茶にとっては厳しい自然環境といえる。

そのため、生産者は霜害を防ぐために大規模に防霜ファンを設置して対応している。こうした人々の努力や工夫についてもつかみやすい教材だといえる。

3 指導計画

本研究で述べる単元の構成を次頁資料1に示した。

Ⅳ 指導の実際

1 切実感をもって追究できる教材

子どもの「なぜだろう」「調べてみたい」といった追究への切実感を高めるために、「熊本の『人吉緑茶』茶筒ラベルを作ろう」という主題を設定した。ラベルを作成するためには、畑の様子や栽培の工夫、生産者の願いなどを明らかにしなければならないため、見学や資料の検討、話

学習活動	みんなで伸びるための教師の指導	時間
1 県内一のお茶の生産量を誇る人吉・球磨地方とその地形について考える。	○人吉盆地の地形をつかませたり人吉の緑茶を試飲させたりして、人吉盆地で生産されるお茶の茶筒ラベルを作ることをテーマとして設定させる。	2
熊本の「人吉緑茶」茶筒ラベルを作ろう		
2 茶の栽培について考える。	○種や生葉などの実物や作業カレンダーを提示し、茶の摘採方法や摘採時期などをつかませる。	1
3 平地と山地の生産の工夫について予想する。	○高原地区(平坦地)と大畑(山間地)の生産の様子を比較し、その違いから課題意識をもたせる。	1
同じ人吉盆地なのに、なぜ高原と大畑とではつくり方が違うのだろうか		
4 平坦地と山地の生産の工夫について調べ、分かったことをシートにまとめる。	○映像、図説、立体地図等を用意したり、提示資料を工夫したりして子どもの目的に応じた調査活動ができるようにする。	3
5 お茶に適した人吉盆地の地形や気候について話し合う。	○自分の考えを明確にして話し合いに臨めるように、シートに事実(根拠)と考えをまとめさせる。	2
6 調べたことをもとに、人吉盆地の茶筒ラベルを作成する。	○地形を生かしたり克服したりする生産者の工夫をラベルに表現させ、生産者や家族に紹介させる。	2

●資料1／単元の構成(11時間取り扱い)

し合いなどを通し、追究への切実感が高まった。

さらに、追究の過程では、お茶作りに対して問題意識を高めるために、盆地の平坦地と斜面の土地の二つの地域を取り上げ、それぞれの茶畑の写真を提示した。子どもたちは、どちらも同じ生産者でありながら、畑の様子や周囲の地形が異なることに強い疑問をもった。そこから具体的なラベル作りに向け、次のことを追究していった。高原(たかんばる)では、広大な平地で、効率的に収益を上げ、一方、大畑(おこば)では、斜面の風通しのよさを生かし、高品質のお茶を作っている。

このようにして、「人吉盆地には、二つの地形の異なる地域があり、人々は、寒暖差の激しい気候を生かしたり、霜や台風などの厳しい自然を克服したりしている」という見方や考え方に高め、生産の工夫を茶筒ラベルに表現することで、熊本県に対する愛情を育むことにもつながっていった。

2 多様な視点からかかわり合うことのできる場の設定

(1) 自分の考えをまとめたシートの活用

かかわり合いの場面では、空想で自分の考えを語ることはないよう、提示資料やゲストティーチャーのお話など、根拠となる資料を明らかにし、考えをシートにまとめさせた。その中で、子どもたちの「大畑は斜面で土地が狭いから、商品としてではなく、生産者が使う分を作っているのでは」「大畑は、わざわざ自宅から20kmも離れた土地であるから、高原で作れない高品質のお茶を作っているのではないだろうか」といった高原とは異なる大畑の茶作りについての考えに着目し、かかわりを促すようにした。

また、人吉盆地のお茶作りの工夫について明らかになったことを、ラベルシートに表現する中で、「人吉盆地という産地のよさや生産の工夫が伝わるようにするにはどうしたらいいか」という視点からアイデアを検討する場を設定した。その結果、独自のキャッチフレーズや切り取った写真などから、人吉盆地の自然のよさや人々の工夫のすばらしさを確かめ合ったり、新たなよさを発見したりしながら、熊本県への誇りや愛情を深めていくことにつながった。

(2) 調べ活動における体験や資料提示の工夫

本実践で取り上げる人吉盆地は、学校から遠方にあるため、現地での調査が難しい。そのため資料の提示方法や調査のさせ方が重要になる。教室壁面を資料コーナーにし、生産者の話し言葉でまとめたカードや複数の角度から撮影した茶畑の写真を提示するなどして、効果的に調べる活動が進められるように工夫した。

また、社会科見学旅行の行程に茶園見学(山都町)を位置づけ、実際の茶園の様子を確かめたり担当の方に説明を聞いたりするなどの機会を設定した。

(3) 子どもの問いやこだわりのある考えをつなぐ

高原と大畑の生産の工夫について調べた子どもたちは、「高原は、霜が降りやすいので、多くの防霜ファンを設置している」「大畑は、土地が狭く平地に比べ収量が少ない」など、それぞれが独自の視点で追究を進めていた。これらの考えは、気候の面、収量の面からなど、多くは一面的なものである。そこで、これらの二つの地域の生産の工夫について、比較、関連、総合してとらえさせるために、考えの根拠となる内容を気候や地形といった項目に分け、各項目における自然の生かし方や工夫を示し、板書で図解しながら整理していった。

3 学習の実際

(1) 人吉盆地のお茶をもっと知ってもらおう

単元の導入では、ペットボトル茶のCM用ロケ



●写真A／高原(球磨郡相良村)の茶畑



●写真B／大畑(人吉市)の茶畑

地となった人吉盆地(相良村)の茶園を見せた。子どもたちは、「人吉のお茶が、ペットボトル飲料としても全国で飲まれているなんて知らなかった」と驚きを示した。

そこで、もっと多くの人に人吉のお茶を知ってもらうために、「熊本の『人吉緑茶』茶筒ラベルを作ろう」という主題を設定した。ラベル作成を通し、地域の気候や地形を最大限に生かしたり克服したりする人々の工夫をとらえさせることがねらいである。「人吉盆地という産地のよさや特色が伝わるラベルにするには、ラベルにどんなことを載せたらいいだろうか」と投げかけると、次のような考えを交流していった。「人吉盆地産が伝わるように、地域の説明があったらいいね」「有機肥料や無農薬といった生産者の工夫も必要だね」「茶園や生産者の写真もあるともっと工夫が伝わると思うよ」このような話し合いの中から、ラベルに表現する情報として、次の項目が出された。

- 生産地や生産者名
- 生産の工夫や自然環境(キャッチフレーズや文章)
- 地域の特徴(絵や写真)
- 商品名(自作のオリジナル名)

これらの項目は、単なる商品用ラベルの情報ではなく、自然環境のよさや生産者の工夫、願いを伝えるものである。したがって、これらの内容を明らかにするためには、生産地の気候や地形、茶葉栽培の工夫、生産者の努力などを具体的に調べる必要がある。

そこで、「ラベルに載せる写真や絵はどんなものがいいだろうか」と問い、人吉盆地の特色を示すものとして、高原台地(写真A)と大畑の斜面(写真B)を提示した。すると、次のような気づきが出された。

- 防霜ファンの数は高原が圧倒的に多い。
- 高原の畑は平らで広い。
- 大畑の畑はきれいな四角形になっていな

い。

○大畑の畑は山の中にあって斜面。

子どもたちは、これらの気づきから次のような疑問をもった。

同じ人吉盆地なのに、なぜ高原と大畑とでは、地形や畑の様子が違うのだろうか。

そして、どちらも同じ生産者であることを知らせると、追究への意欲はさらに強まった。資料2は上の疑問について話し合った時の様子である。子どもたちは、山の狭い斜面で茶を作る生産者の思いについて、収益や作業の効率性、使用目的などの視点から予想を交流するものの、なかなか納得のいく考えに至らなかった。そのため、ラベルを作成するためには、まずは、生産者の考えや生産地の特色についてしっかり調べる必

C1 : 「生産者は、なぜ地形の違う場所でお茶を作っているのかな。」

C2 : 「それだけ生産量が増えて利益が大きくなるからだと思うよ。」

C3 : 「でも、わざわざ家から20kmもある大畑の山に行って作るのは時間や燃料代もかかるし大変だよ。」

C4 : 「大畑は遠くて狭いから世話が行き届かず家庭用。それで高原の畑は広いいい畑だから商品用じゃないかな。」

T : 「なぜ広いといい畑と言えるのかな？」

C4 : 「機械でできるから。」

C5 : 「大畑は山だから機械ではやりにくい。」

T : 「大畑では、手作業でやっているのかな。」

C5 : 「たぶん……」

C6 : 「機械の種類が違うかも。」

C7 : 「よく調べないとラベルは作れないね。」

●資料2／疑問について話し合う様子

要があることを実感していった。

(2) なぜ高原と大畑とでは作り方が違うの？

前時までに出てきた疑問についての追究が効果的に進められるように、教師自作の資料を教室に提示した。表題だけを見て必要な資料を見つける作業にならないように、あえて内容を分類せず、「○○さんのお話」というような表題をつけ、生産者の生の声が伝わるような提示を工夫した(資料3)。

また、地形の特色や土地の高低差をとらえや

○○さんのお話

人吉地方は、台風の通り道なんです。台風のシーズンになると大畑は山間部にあるので、台風の被害をよく受けます。植えてから1～3年までは、台風が近づく、根が十分にのびていないので、風で木全体がぐるぐる回り、根が切れてしまうこともあります。



そこで、幼木の両わきにソルゴーを植えるんです。ソルゴーは、ふつう家畜のえさとして植える作物です。成長が早く、茎や根がじょうぶなため、幼木の両脇に植えることで強風から木を守ってくれるんです。また、ソルゴーの大きな葉が、幼木に日かげを作ってくれるので、昼間の強い日差しからも守ってくれるんです。植えて3年目ぐらいまでは、根が浅く、強い日差しや強風には弱いんです。ソルゴーは冬にしかれるので、冬には、代わりに植えています。夏場は、このように草取りも大切な作業で、ほんとにと一面草でおおわれてしまいます。

●資料3／提示資料(教師自作)



●写真C／立体模型地図(教師自作)

すくするために、立体模型地図(写真C)を作成した。子どもたちは、高低差を指で触れて確かめたり、畑の広さや位置を確認したりしていた。

「同じ人吉盆地なのに、なぜ高原と大畑とでは地形や畑の様子が違うのだろうか」という課題に対し、子どもたちは、自分の考えの根拠となる事実を提示資料から読み取りながらシートに



●写真D／「大畑の茶は値段が高いんだ」



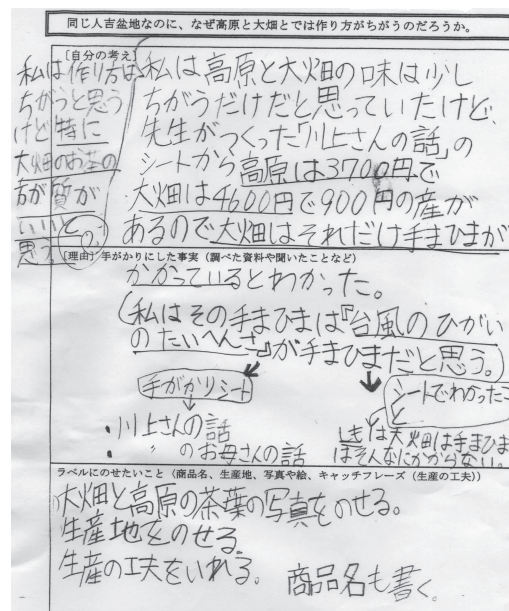
●写真E／「ほら茶の実だ!」



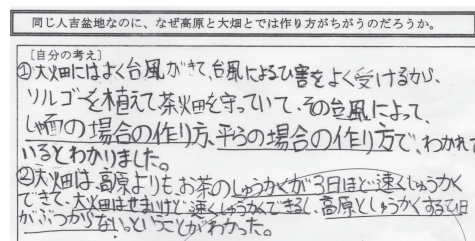
●写真F／「なぜ扇風機があるのですか?」

記録していった(写真D)。社会科見学旅行での山間部にある茶園(山都町)の見学では、茶畑の広がりや機械で摘採された茶畑の様子を初めて見る子どもたちが、「緑が波打ってきれい」「地図記号と同じ三つの種が入った実を見つけたよ」と発見や驚きを互いに報告し合っていた(写真E)。また、茶園を管理されている方にお茶栽培の工夫について取材を試み、「お茶は霜に弱い、霜が発生する気温差が激しい土地のほうがおいしいお茶ができる」という事実をつかんでいった(写真F)。

このような調査活動や見学を通して、子どもたちはそれぞれ課題に対する自分の考えと根拠となる事実を整理してシートにまとめていった(資料4・5)。



●資料4／あいがまとめたノート



●資料5／たつおがまとめたノート

あい子（仮名）のシートには、大畑の茶の単価が高原より900円高いことや、台風の対策で手間暇がかかることから、「大畑では高原よりも品質のいいお茶を作っている」という考えを示していた。一方、たつお（仮名）のシートには、「大畑は土地が狭いけど収穫時期が早い」ことを記述していた。あい子の「種類の異なるお茶の生産」という考えは、たつおの「収穫時期の違いによる作業の効率化」という考えとは異なっており、こうした子どもたちの相違点に着目して意見を取り上げていくことにした。

(3) どちらも自然を生かして工夫しているんだ！

調べたことを持ち寄っての話し合いでは、次のような考えを交流していった（写真G）。

高原に対しては、「平らな土地が広いので、大型機械で効率的に摘採している」「低地で霜が多いのでファンを回して霜害を防いでいる」、大畑に対しては、「高地で風がよく通るため、霜が少なく成長も早い」「山の上で台風の被害が多いから幼木の両脇にはソルゴー（飼料作物）を植えて強風から木を守っている」と、各地域の人々の工夫や努力をとらえていった。

二つの地域の生産の工夫について比較、関連、総合してとらえさせるために、考えの根拠となる資料を全体で取り上げたり（写真H）、資料6のよ

うに視点ごとに板書を整理したりしながら支援を行った。

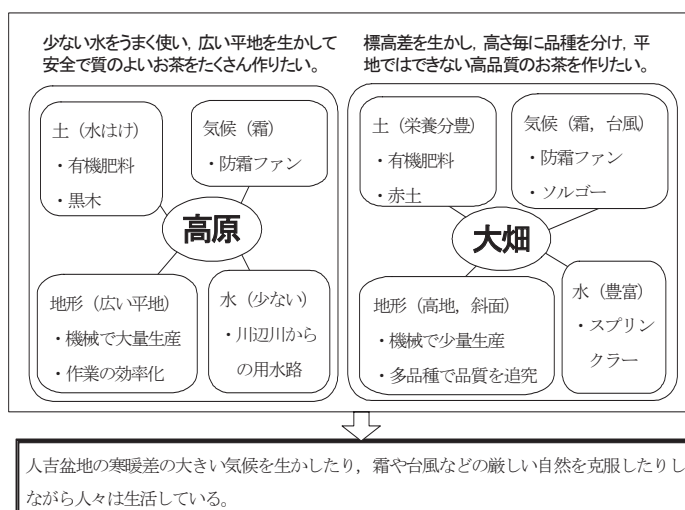
それまで人吉盆地のお茶作りに対し、地形の



●写真G／「地形の違いで高原では霜害、大畑は台風の害があるけど、それぞれ工夫しているよ」



●写真H／根拠となる資料の提示



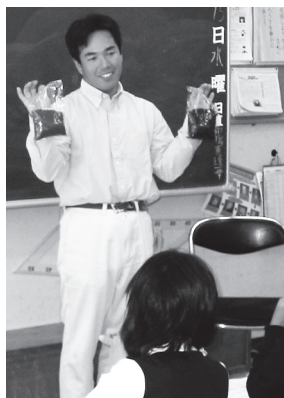
●資料6／話し合いで明らかになったこと

面、土壌の面など一面的なとらえ方をしていた子どもたちは、他の子どもたちが根拠にした事実を聞いたり、提示資料についての教師の補足を聞いたりしながら、次のようなとらえ方ができるようになっていった。

「生産者は、収量の増加だけではなく、地形の異なる二つの生産地をもつことで、それぞれ違った特色のお茶を作ろうとしている。」



●写真I／児童の作成した茶筒ラベル



●写真J／「魚粉や焼酎かすが肥料です」



●写真K／商品化が実現した茶筒

「高原は、有機肥料など土の改良に力を入れているから、収量だけでなく品質も大切にしている。」

「大畑は、高地の風通しのよさを生かして高品質、高価格のお茶を作っている。」

このように考えを交流する中、平坦地・斜面両者ともその地形条件が生産に生かされていることに気づいていった。また、二つの地域の違いを地形あるいは気候といった一つの視点からとらえていた子どもは、互いに根拠としている資料を検討し合う中で、地形、気候、水、土などの多様な視点から違いをとらえ直していった。

(4) オリジナルの茶筒を作って人吉盆地のお茶のよさを伝えよう

二つの地域のお茶作りの工夫や努力について学んだ子どもたちは、「斜面を生かした大畑のお茶のラベルを作りたい」「気温差の激しい広大な茶畑で作っている高原のお茶のラベルを作りたい」「人吉盆地をPRするラベルにしたい」とそれぞれ自分の作品のイメージを膨らませていった。

ラベル製作では、「人吉盆地の特色が表れるように、『霧深い』という言葉はどう?」「だったら茶畑の写真より盆地全体の絵があるといいね」「高原のお茶なら、広大な茶畑の写真がいいね」「大畑のお茶には、高い山がわかるように標高350mという言葉を入れたらどうかな」といったかわりが見られた。子どもたちは、人吉盆地の自然環境や地域の人々の知恵や努力をとらえ、自分なりの表現方法で作品をまとめていった(写真I)。

(5) 僕らが作った茶筒が商品に!

茶筒の完成後、生産者の方がゲストティーチャーとして来校することになり、作品の評価や生産の工夫の補足をして頂いた(写真J)。その後、茶筒の商品化が決まり、学習への達成感が高まった(写真K)。

V おわりに

1 お茶作りを通して地域の自然環境を多面的にとらえる

『人吉緑茶』茶筒ラベルを作ろう」という主題を設定し、人吉緑茶の試飲体験やCM撮影場所の映像提示（相良村の茶園）により、人吉盆地の茶栽培の工夫を追究する切実感が高まった。さらには、子どもたち自作の茶筒の商品化が実現できたことで学習への成就感を味わうことができた。

また、自然条件に大きく依存する作物としてお茶を扱い、平坦地と周囲の斜面部の土地との二つの地域を比較させながら取り上げた。そのことで、「同じ人吉盆地でも斜面と平坦地では、全然違ったお茶ができることがわかった」という感想にもあるように（資料7）、お茶作りを収量、品質など一面的な視点でとらえていたものが、人吉盆地の気候や地形などに着目して多面的にとらえることができるようになった。さらに、県内の他地域を学習する際、お茶栽培の事実に着目し、どんな気候を生かし、どんな厳しい環境を克服してお茶を作っているのかという視点で、その土地の自然環境をとらえていくことができた（資料8）。

2 今後の実践に向けて

この教育実践に当たって、次のことが課題としてあげられる。

- ・切実感をもって追究できる教材のさらなる開発
- ・異なる立場や視点からの意見を、自ら関連づけて考えられるような手立ての工夫
- ・子どもたちの対立する考えやこだわりのある考えの見取り方と取り上げ方

今後は、これらの課題解決に向けて研究を深めていきたい。

＜感想＞
最初、人吉盆地でお茶が作られていることや、きりができること、はしりなれたけれど、勉強していきうちは、もしもがあるとお茶は赤くなってしまうから、防虫ネットをかけることなど、きりはお茶にとてもいいこと、や同じ人吉盆地でも、しゃんとへいやでは、全編がたお茶ができることなどがわかってきました。
最後、ラベルを作ったけれど、最後、川上さんにもゆえうれしかったです。

●資料7／授業後の感想

今日の学習を振り返って 4年3組 ()
なぜ天草でもお茶を作っているのか

○学習を通して、考えたことや学んだことを書く。

人吉と天草では、人吉のほうがお茶として、いいじょうけんで、天草はお茶を作っていないと思っていました。潮風や、日差しが強いから、あまりいいじょうけんではないけれど、気候が合うので、人吉と比べて、ものすごく早く出荷できそうです。お客はその早く出荷されたお茶を買い、ということも、とてもいいと思います。また、土がかわらないように、わらをかぶせたり、土の中の岩をきいてくんだりして工夫して、いてすごいいと思います。

●資料8／授業の子どもの感想